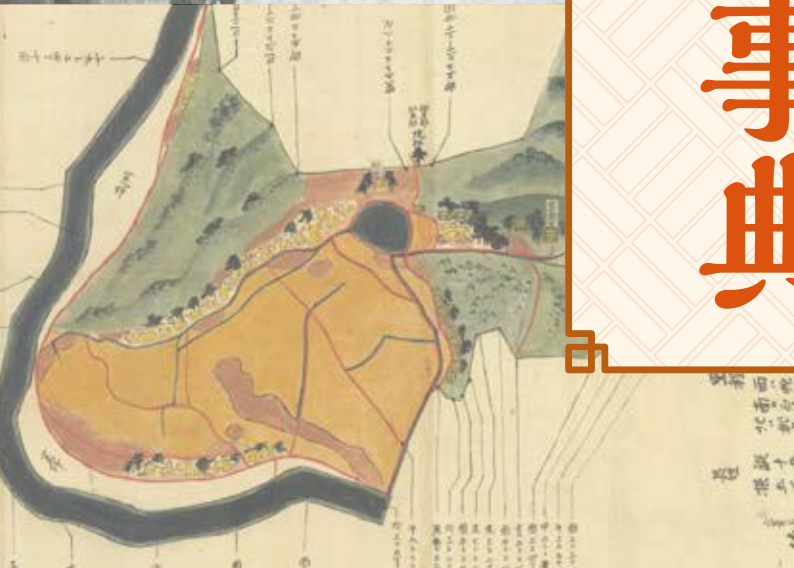


稲井事典

写真と地図で見る歴史



地名の由来

地名の由来については、土地によって様々な口伝や伝説等が存在する。ここでは、その一部を紹介する。

「稲井村」

1889(明治22)年の新村誕生の際、旧村名称の採用を譲らず、大瓜村または真野村が有力視されたが、旧村名採用時は部落間対立が激化する恐れがあるとの観点から、星廉延村長と佐藤文輔県議の斡旋で「稲井村」が誕生した。「井内」に語呂が相通じ、“農村地帯にふさわしく、汲めども尽きぬ井泉のごとく豊穰満作であれ”との祈念をこめて名付けたという。

① 牡鹿(おしか)

歴史的記録は古く、古代陸奥国に置かれた五柵の一つに牡鹿柵があり、『続日本紀』には牡鹿連を24人賜ったとある。伝説としては、古来この地に牡鹿と牝鹿が睦まじく生息していたが、ある日その牝鹿を失った牡鹿がさも悲しむように泣き続け、ここに倒れて死んでしまった。これを見た里人等がそれを哀れみ、そこに松を植え、その下に屍を埋めたという。この松を「牡鹿の松」といい、この地名の由来となった。現在の石巻市湊鹿妻にある洞窟がこの地であるという説もある。

② 石巻(いしのまき)

その昔、現在の北上川となる一迫・二迫・三迫川を総じて伊寺川と呼び、その河口としてこの地を伊寺水門(いじのみなど)、または牡鹿湊と呼んだ。さらにその河口付近に広がる草地、荒地を牧と言い、伊寺の牧となり、そこから転訛して石巻となったと考えられる。また、安永の「石巻村風土御用書出」には、「当村端郷住吉町住吉大明神社地わきに、石巻石、石巻淵座候に付き、その縁を持って村名に唱え申し候」とあり、「巻石」からと言う説もある。

③ 南境(みなみさかい)

北上川の河道改修前は蛇田村のはずれだったが、改修後は単独で南境となった。牡鹿郡・桃生郡両郡境の南に位置するから南境といわれる(「安永風土記」)。慶長5(1600)年の「葛西大崎船止日記」(伊達家文書)に「おしがの内さかい、舟舂そう」の記述もある。桃生郡側にも、旧河北町北境という地名で残っている。(平凡社刊「宮城県地名」)

④ 大瓜(おうり)

大瓜も河道改修前は蛇田村に属していたが改修後は蛇田村から外れた地区である。『蛇田村安永風土記』に、「村内の百姓の家に毎年営巣する燕が、ある日くちばしに種をくわえて飛んできてそれを庭に植えたところ、大きな瓜ができた」ことから大瓜の地名となったという。(平凡社刊「宮城県地名」)

⑤ 井内(いない)

アイヌ語で悪い川を指すウエン・ナイが転訛し、イエンナイ〜イナイとなって井内という字が当てられたという説が有力。真野川を挟んでその一体を井内と称したが、湊側を湊村井内、大瓜側を大瓜村井内と呼び分けていた。(平凡社刊「宮城県地名」)

⑥ 高木(たかぎ)

「安永風土記」に当村鍛冶屋敷山神社に杉の大木があり、代々受け継ぎ巨木となって村の象徴となったという説があるが、それ以前に石巻城主葛西宗清が飯野川七尾城攻略時に、この地の呂主・高木四郎衛門の地に陣を敷き高木も参戦した事実があるため、葛西の高木一族が居を構えた頃から高木郷と称した説が有力。(平凡社刊「宮城県地名」・「稲井町史」)

⑦ 上品山(じょうぼんさん)

「高木村安永風土記」に、「熊野社の一小名 上品宝来山」とあり、旧跡の項には「一上品山寺、宝来山上品寺」と記されており、それらから、その後上品山となったと推定される。(平凡社刊「宮城県地名」)

⑧ 水沼(みずぬま)

「牡鹿郡万御改書上」に、「一松吉本 廻八尺 水沼という沼あり」とあり、それが地名の由来とあるが、一方、この地に水沼某という郷士が居していたことから水沼郷となったという説もある。(平凡社刊「宮城県地名」・「稲井町史」)

⑨ 真野(まの)

真野の旧家三浦家所蔵の「風土記書上」に、往古の時代、この地が入江間野から真野となったとあるが、アイヌ語の開拓集団地を指すマノから真野になったという説、真草が生えている野原という由来説もある。(平凡社刊「宮城県地名」・「稲井町史」)

⑩ 沼津(ぬまつ)

「安永風土記」に、往古の時代から沼があり、そこが入江(津)となっていたことから沼津と称したとあるが、一方、『浄蓮寺寺伝』には天正年間に駿河国沼津村(現静岡県沼津市)の沼津三郎衛門がこの地を開拓し己の姓を冠したという説もある。(平凡社刊「宮城県地名」・「稲井町史」)

⑪ 沢田(さわだ)

沢辺にある田の意味(「宮城県地名考」)説と、地形が矢沢多く、古来沢を開いて耕地としたことから沢田となったという説がある。亶理郡の阿武隈川河畔にも同名の部落が存在する。(平凡社刊「宮城県地名」・「稲井町史」)

⑫ 流留(ながる)

「安永風土記」に、「昔、一葉の愛らしい舟が浪のままに漂流してこの地の島に留まった。やんごとなき日女だったが、問うと「旭天女」と申し者と答え消えてしまった。護持尊があったのを弁財天として祀り、流る留まるの縁により、地名を流留と称した」とある。さらに「この島を旭島と呼び、身柄を取り上げた坂を取上坂、塚を天女塚と呼んでいる」ともある。また、明治22年の町村合併では、隣接する根岸村と訴訟等の諸般の事情により、距離のある大瓜村他8か村との合併を宮城県知事に直訴し、稲井村の大字となった。(「石巻の歴史」)

⑬ 万石浦(まんごくら)

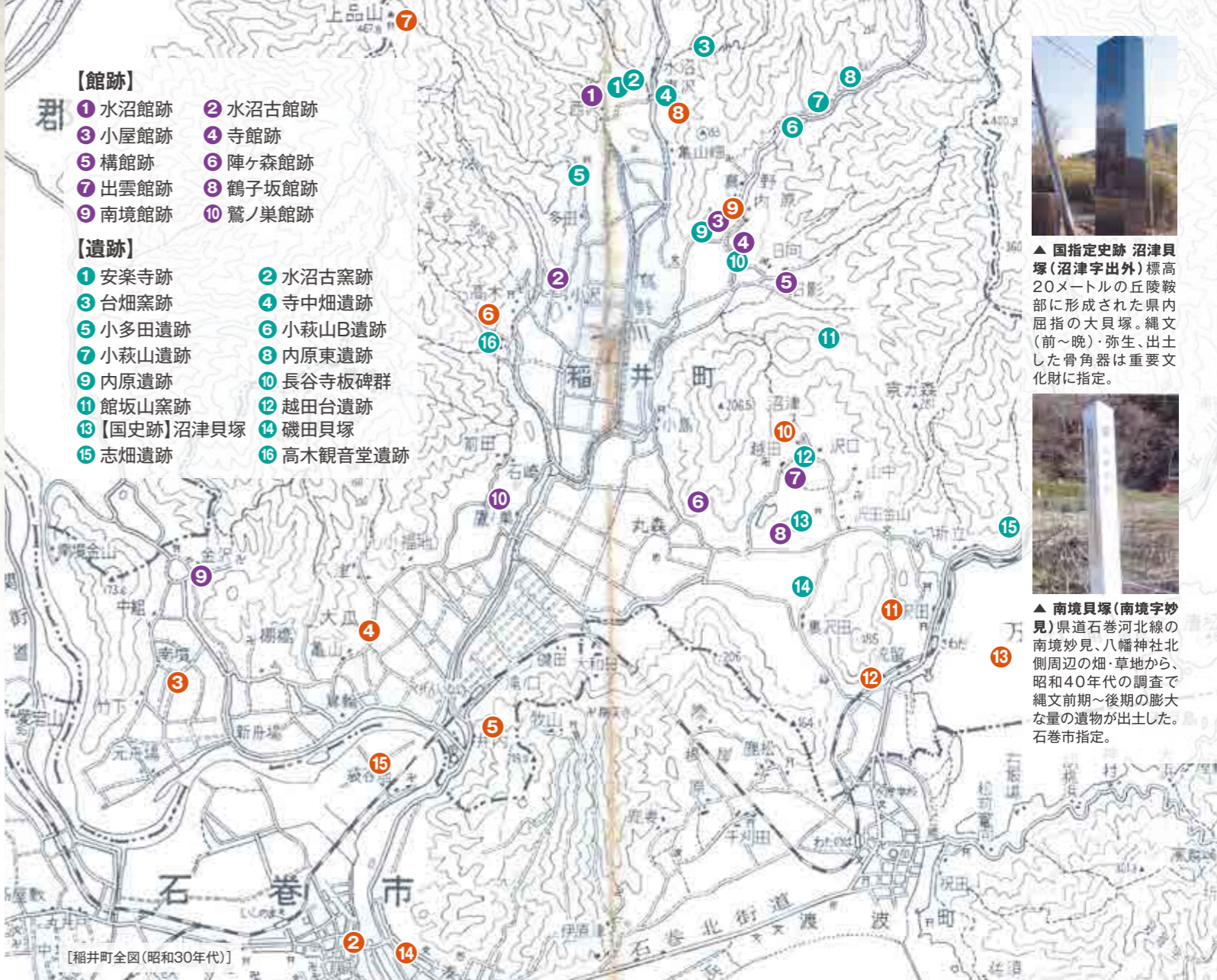
東西約5km、南北約3 kmのこの入り江は昔から「奥の海」と呼ばれ、古くから和歌に詠まれてきた。「奥の海」という歌枕はこの万石浦だという説が有力。二代仙台藩主・伊達忠宗公が牡鹿半島への鹿狩りに寄った際「ここを干拓すれば一万石の米が収穫できるであろう」と語ったことが由来となったと言われている。(「石巻の歴史」)

⑭ 湊(みなと)

その昔迫川がこの地に流れ、海に注いでいた頃、小鹿(牡鹿)郡湊之津とあり、これが湊の由来といわれる。はじめは石巻もこの湊之津に含まれており、江戸時代には、牡鹿湊の親湊という表記もある。(「石巻の歴史」)

⑮ 袋谷地(ふくろやち)・内谷地(うちやち)

石巻地方には、谷地という地名が多いが、袋谷地は、川村孫兵衛による北上川改修によってできた袋形状の湿地帯という由来がある。藩政時代に足軽たちが入植し開拓した場所で、当初は住吉町側の川沿いに足軽屋敷が立ち並び、その奥に長林寺が建立された。昭和40年頃、埋め立て工事により住宅地化され、現在は水明南・北という町名になった。内谷地という地名は、その内側にあったからと思われる。



▲ 国指定史跡 沼津貝塚(沼津宇外) 標高20メートルの丘陵鞍部に形成された県内屈指の大貝塚。縄文(前～晩)・弥生、出土した骨角器は重要文化財に指定。



▲ 南境貝塚(南境宇妙見) 県道石巻河北線の南境妙見、八幡神社北側周辺の畑・草地から、昭和40年代の調査で縄文前期～後期の膨大な量の遺物が出土した。石巻市指定。

稲井地区は、石巻でも一番歴史のあるところ。

約7000年前(縄文時代初め)は、石巻地域はまだ“海”の中だった。海拔20mの等高線を引くと、沼津貝塚、南境貝塚などの場所と一致する。稲井地区は石巻地方で最初に人が住み始めた地域と言える。その時代の遺跡や中世期の館跡がこれだけ残る貴重な地域。



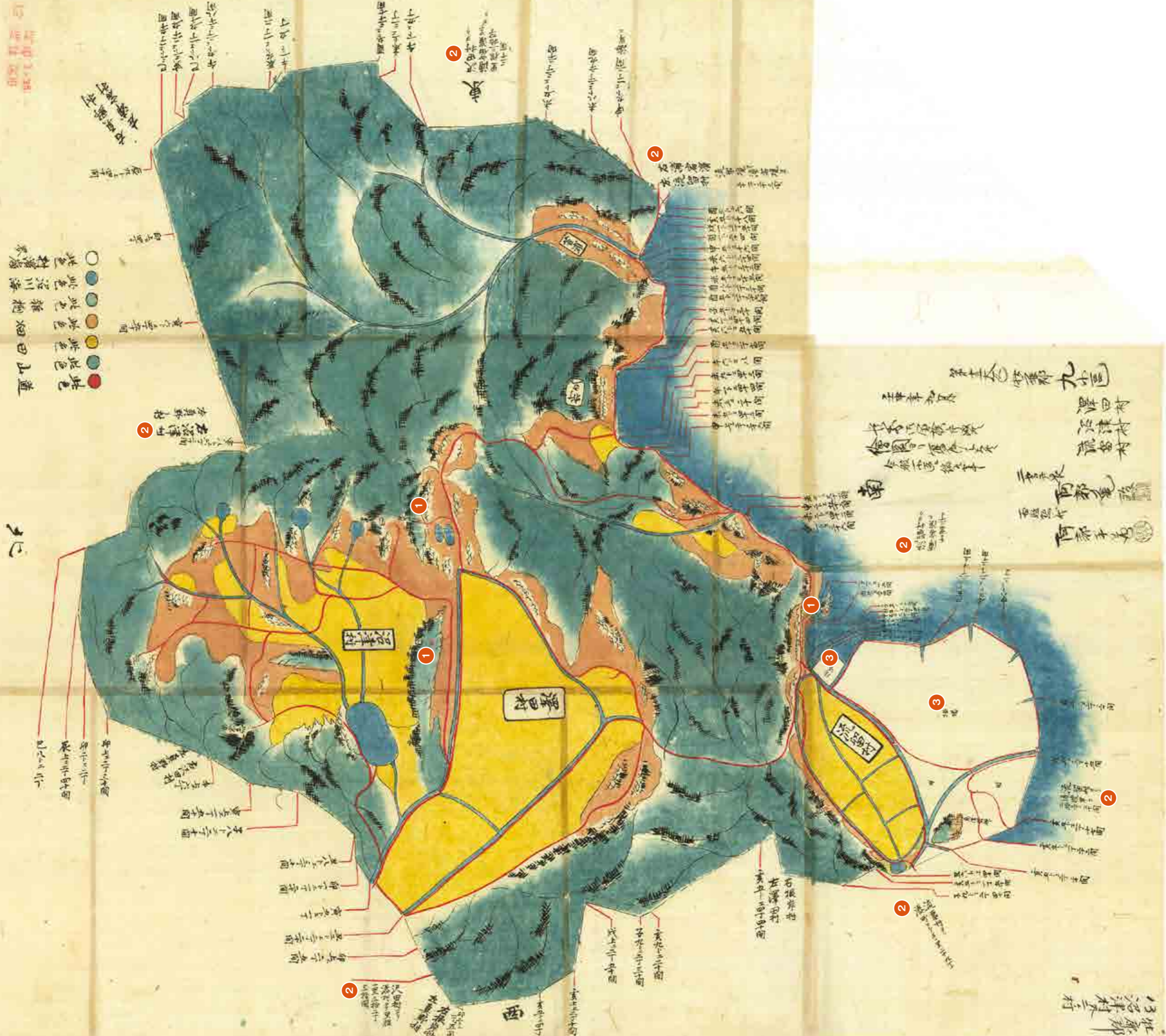
▲ 零羊崎神社鳥居・狛犬(真野宇内原) 平安初期、延喜式大社として記され、社殿は、石段を登った高所にある。社殿前には江戸期・堀内石材店刻銘の狛犬が鎮座。

▲ 荷替え坂 北境村久保から上がつてきた坂を地元の人は今でも「荷替え坂」という。郡境の山側に石垣を組み、運送の安全を祈願したであろう「馬頭観音碑」などがある。

▲ 牡鹿・桃生郡境 昔の街道、道幅3mの南境妙見坂。登りきった広場が郡境。山側に建つ山神碑。この広場で双方から上ってきた馬の背から荷を降ろし、積み替える。

▲ 真野堂原 真野長谷寺入口にある「真野堂原」は、万葉集にも、松尾芭蕉の奥の細道でも詠まれている。また、この葎は、祭祀に直接関係したとされる片側だけに葉がつく「片葉の葎」としても有名。

- 此は村邊
- 此は河川
- 此は柳
- 此は田
- 此は畑
- 此は山
- 此は道



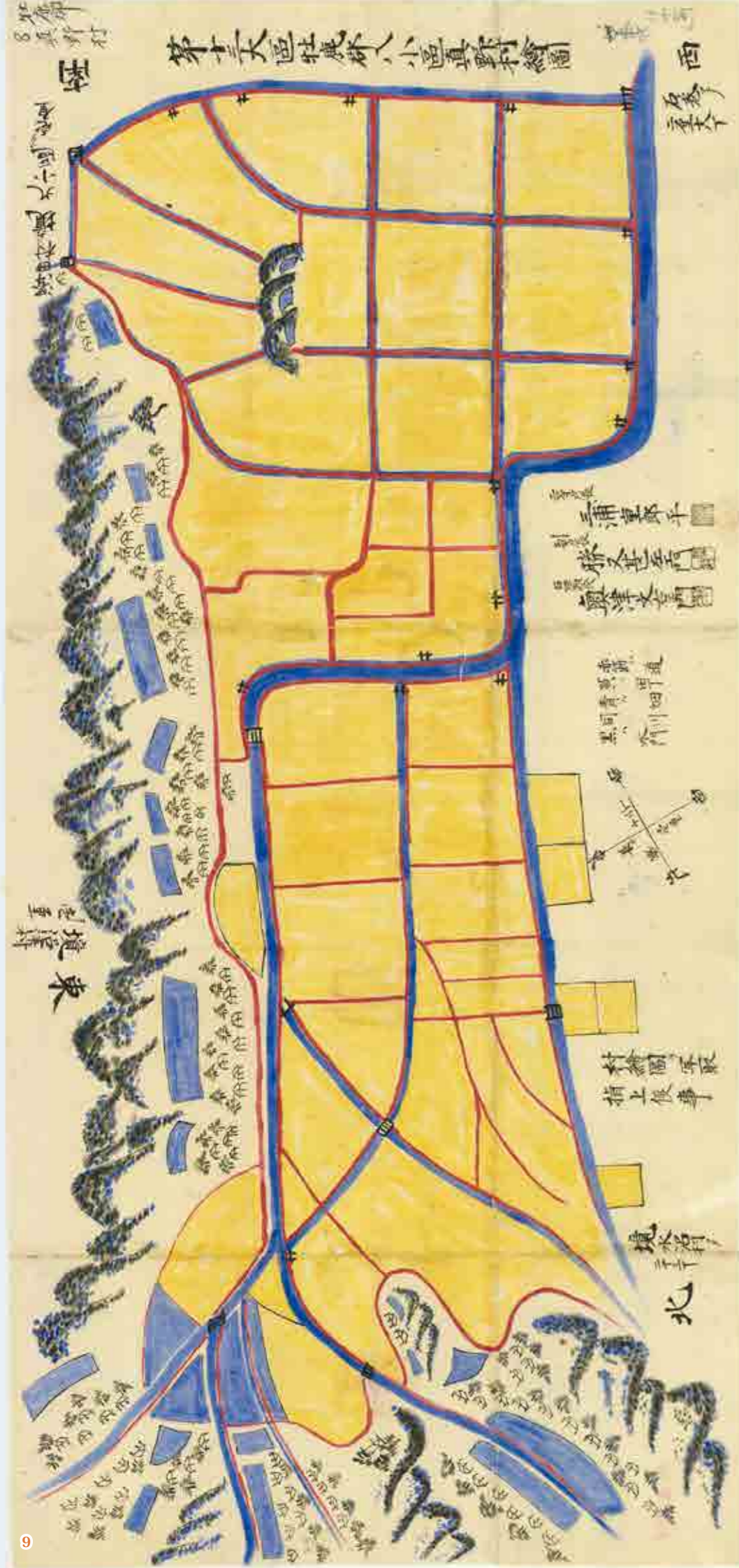
地図1 「牡鹿郡流留村・沼津村・沢田村」(明治5~7年・宮城県公文書館蔵)

表題に「第十三区牡鹿郡九小区 流留村 沼津村 沢田村」とあるところから、明治5(1872)年4月の大小区制施行から明治7(1874)年の区の再編までの期間の絵図。赤い線が道路、青色が水路・池となり、現在とは異なる点も多いが、赤い線の道路、神社①等で現在の状況と比較できる。また、測量時の方角と各間距離、主要地までの距離②が記入されており、興味深い。また塩田だった塩場③も記されている。



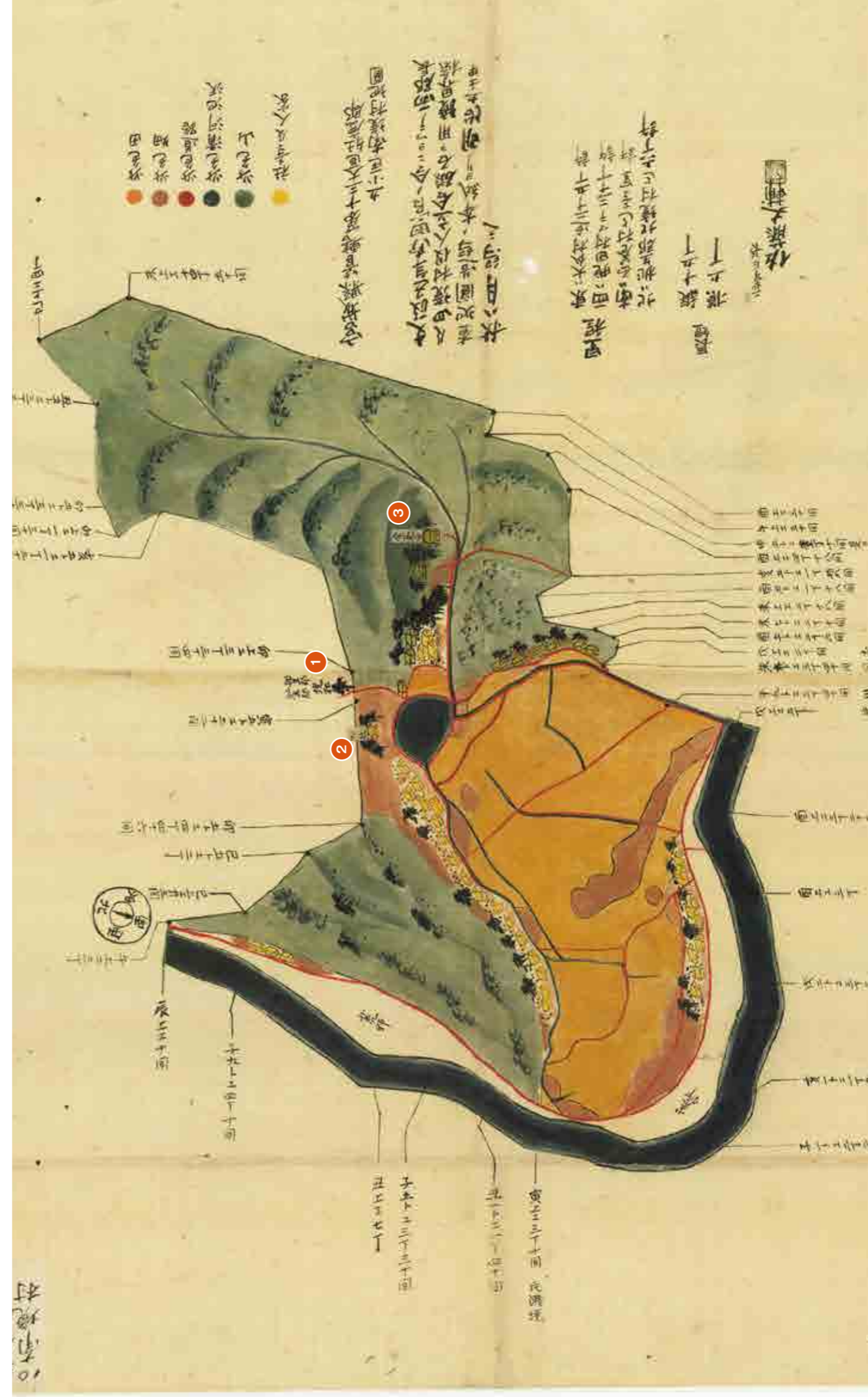
地図2 「陸前國牡鹿郡大瓜村地籍繪図面」(明治5年頃・宮城県公文書館蔵)

現在も残る小字名も見える明治初期の大瓜村の地籍繪図。当時の水路、道路、田や畑、宅地などの地目も記載されており、多くの共同墓地があったのがわかる。また、隣村との境界線①も明確で、稲井村誕生前、真野川南岸の井内地区が湊村②だったのが読み取れる。



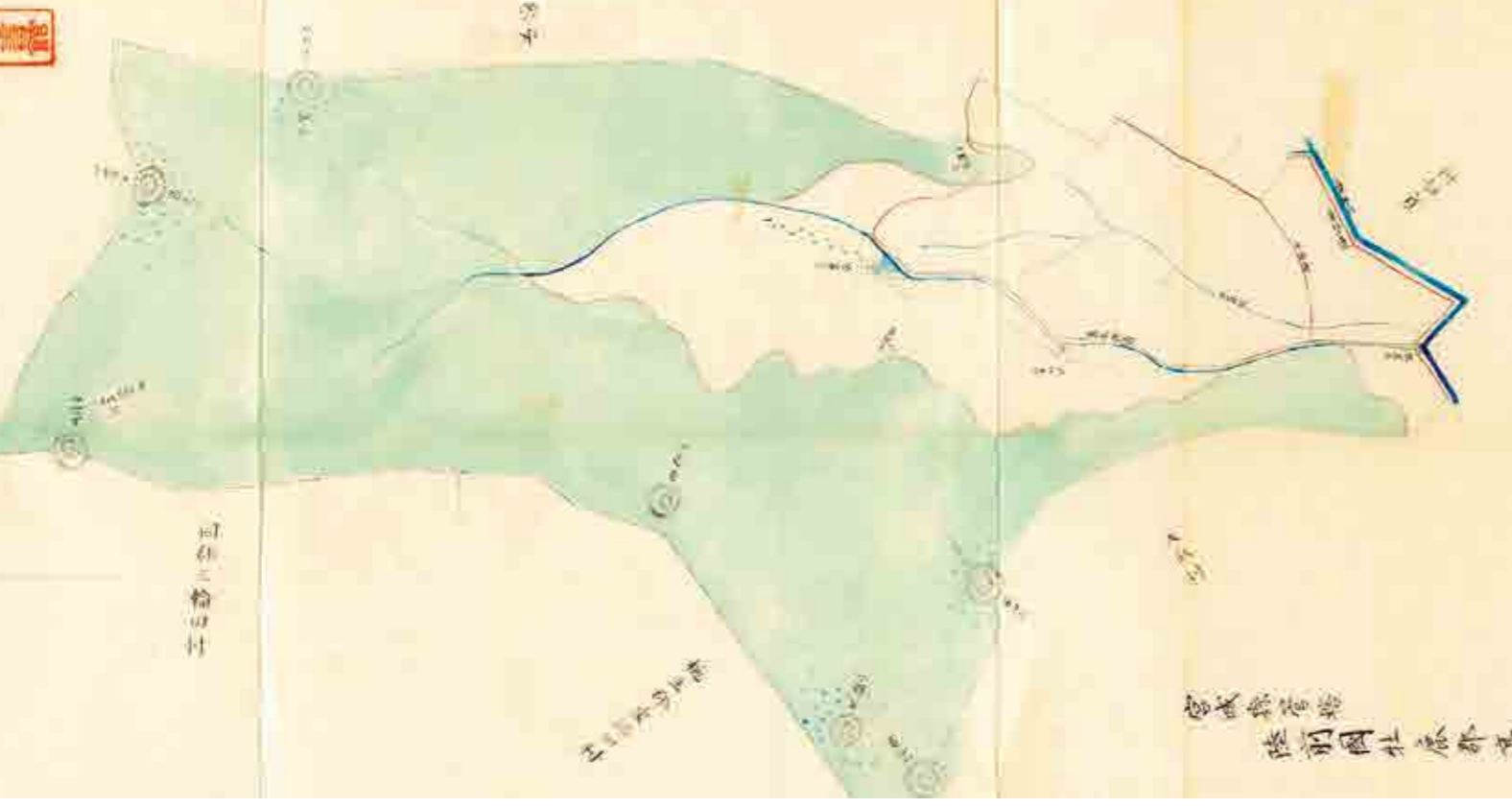
地図3 「第十三大区牡鹿郡八小区真野村繪圖」(明治5～7年頃・宮城県公文書館蔵)

こちらも第十三大区の表記があることから、明治5(1872)年4月から明治7(1874)年の区の再編までの絵図と考えられる。この絵図には、他の絵図には見られない家が記されており、山沿いの地区ごとの家並みの様子が伺える。同時に田や水路・池の配置が、当時の稲作と水の重要性を表していると考えられる。



地図4 「牡鹿郡南境村地図」(明治5年頃・宮城県公文書館蔵)

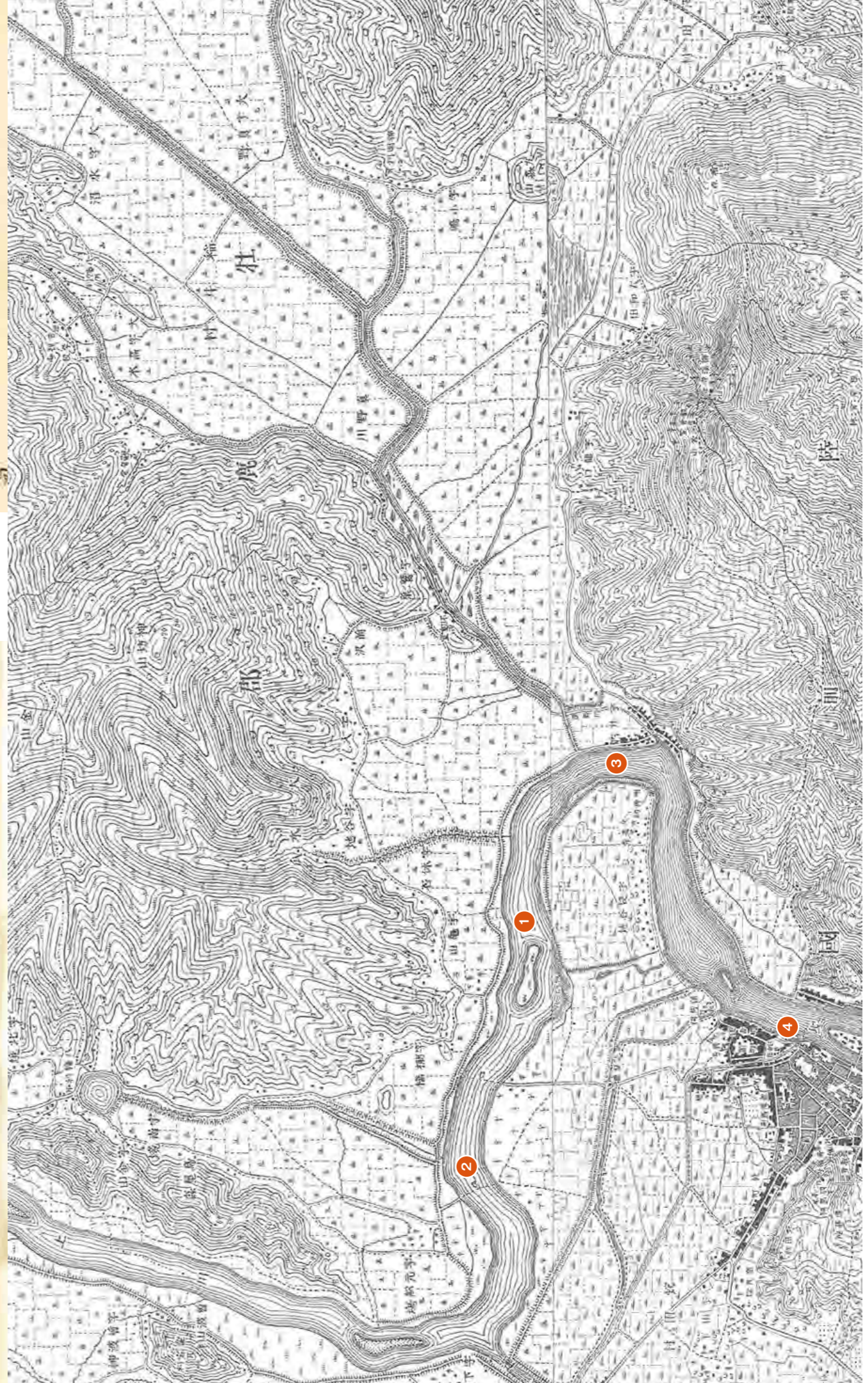
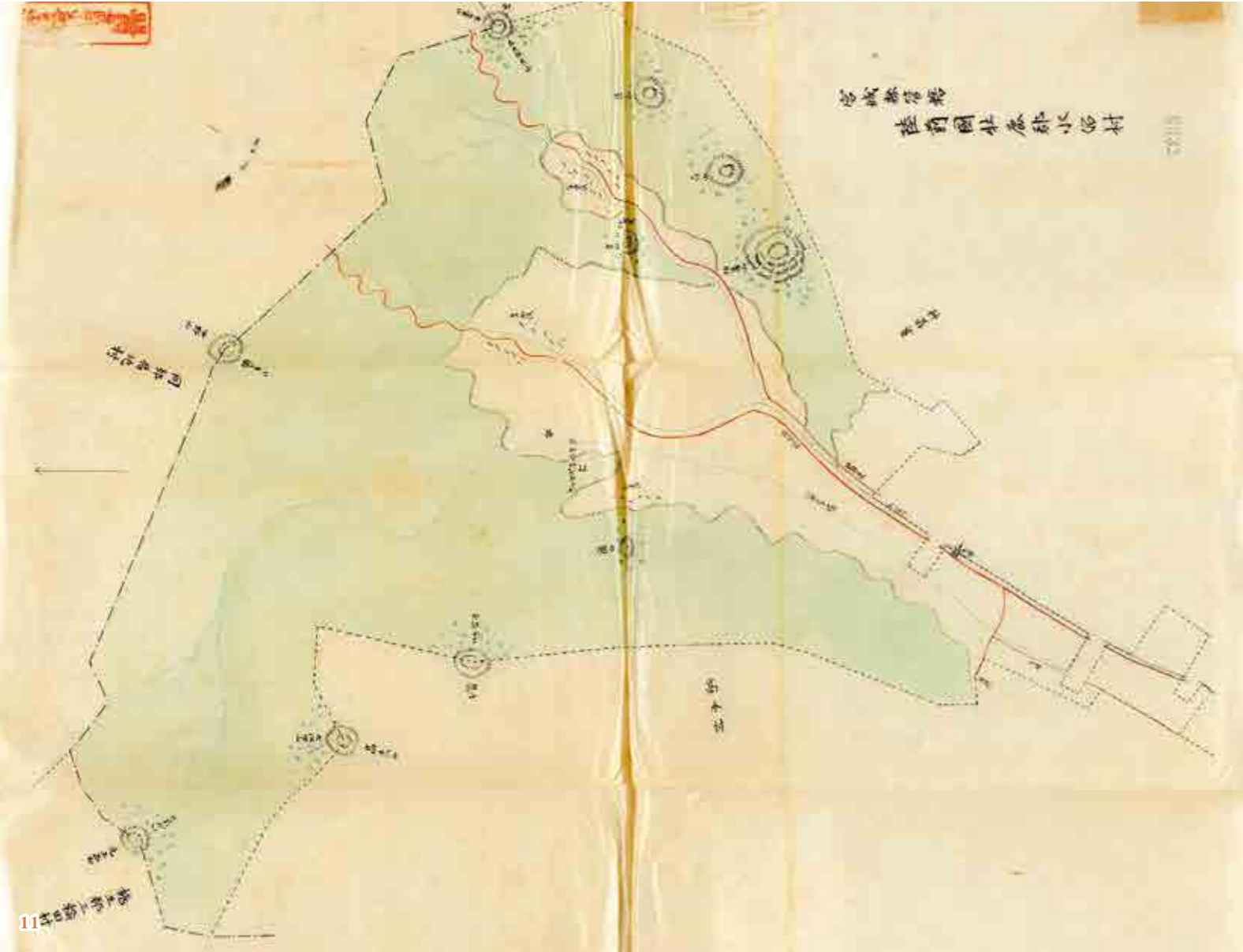
こちらも第十三大区の表記があることから、明治5(1872)年4月から明治7(1874)年の区の再編までの絵図と考えられる。中央の溜池からの水路沿いに人家が並んでいるのがわかる。こちらでも隣村との境界線は明確になっているが、牡鹿郡と桃生郡の境松①があった様子や南境村の村社②と金蔵寺③が記載されている。



地図5 「陸前國牡鹿郡高木村」(明治5年頃・宮城県公文書館蔵)

地図6 「陸前國牡鹿郡水沼村」(明治5年頃・宮城県公文書館蔵)

どちらの絵図も、地目等は記載されていないが、当時の水路や道路が明確に記載されており、現在との比較がしやすい絵図となっている。また、隣村との境界線が明確になっており、村単位での行政区割りが明確だったことが伺える。

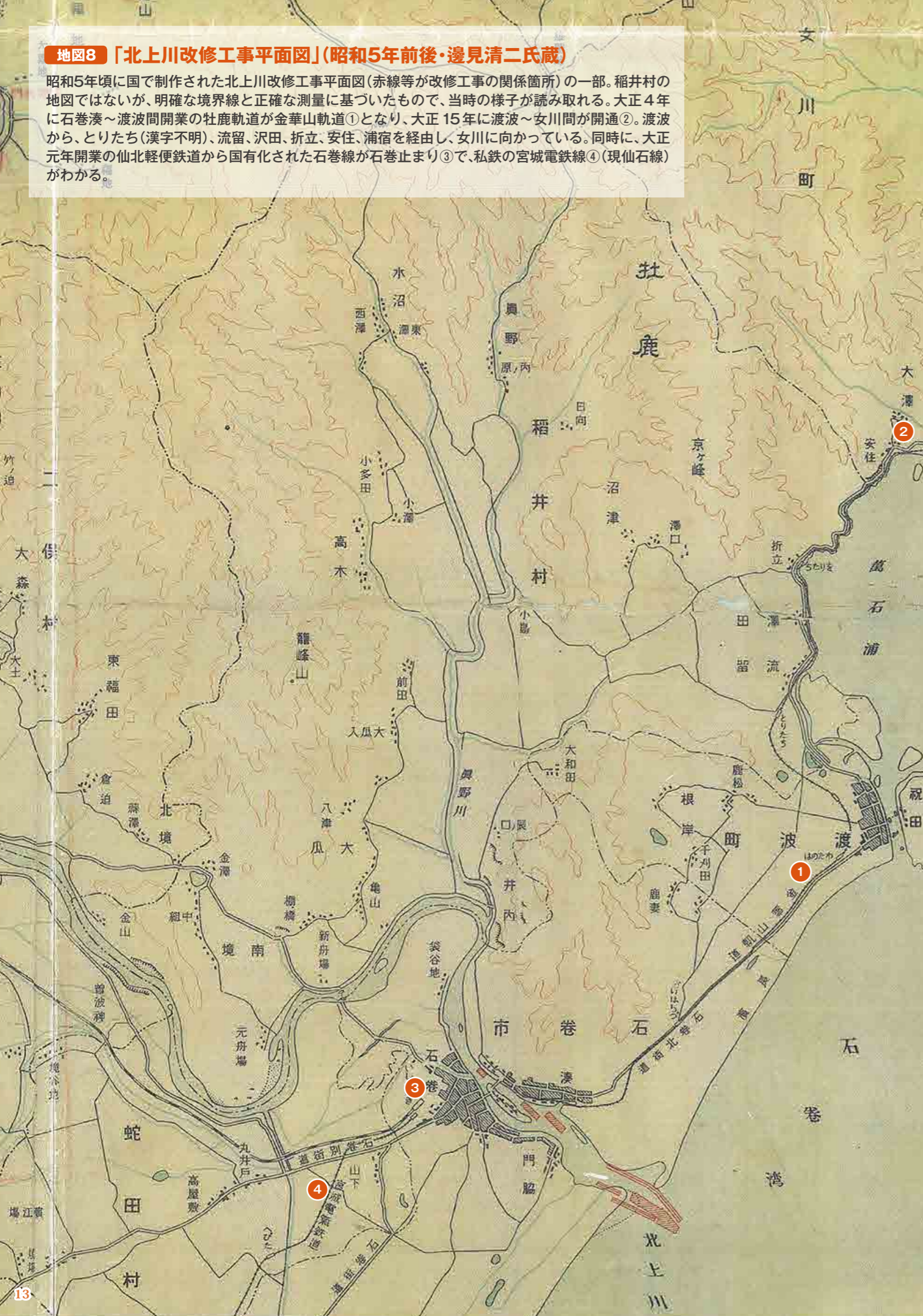


地図7 「測量国土地理2万分の1(拡大)」(明治25年)

稲井村誕生後の、「鯨野川」「石巻」両地図を合成したため、スレが生じている。河川改修前の北上川は、河道もなだらかではなく、中洲①(現在の開北橋付近)があり、南境元舟場～水押原間の「多膳渡し」②が記載されている。「多膳渡し」は、仙台藩重臣浅井多膳の私用の渡しとして始まったもの。明治15年の内海橋架橋以前は川を渡る方法はなく、「藤の巻渡し」③(藤の巻～袋谷地)、「上の渡し」④(別名:軸の渡し・湊北目町～住吉)、「中の渡し」(湊田町～中町)、「下の渡し」(湊本町河岸～門脇札場)などが存在していた。特に、「下の渡し」は、昭和50年代頃まであった。

地図8 「北上川改修工事平面図」(昭和5年前後・邊見清二氏蔵)

昭和5年頃に国で制作された北上川改修工事平面図(赤線等が改修工事の関係箇所)の一部。稲井村の地図ではないが、明確な境界線と正確な測量に基づいたもので、当時の様子が読み取れる。大正4年に石巻湊～渡波間開業の牡鹿軌道が金華山軌道①となり、大正15年に渡波～女川間が開通②。渡波から、とりたち(漢字不明)、流留、沢田、折立、安住、浦宿を経由し、女川に向かっている。同時に、大正元年開業の仙北軽便鉄道から国有化された石巻線が石巻止まり③で、私鉄の宮城電鉄線④(現仙石線)がわかる。



石巻市都市計画図



地図9 「石巻市計画図」(昭和9頃・本間英一氏蔵)

昭和9年頃の「石巻市計画図」。残念ながら稲井村全域の掲載はないが、字名の金澤①、中組②、竹下③、元舟場④、新舟場⑤、箕輪⑥などの掲載がある。また、現在あまり使われなくなった中座峰⑦、船山⑧、草刈山⑨、葛和田山⑩、不動山⑪などの山名も見られる。他にも、田畑の農地区画整理が行われている様子も読み取れる。川向こうの水押地区には、毛利氏の私設日輪グラウンド⑫(後の市営水押し球場)や、石巻競馬場⑬(昭和6年開場)が掲載されているが、現在の駅北側の中里方面の賑わいは当然見られない。



地図10 「石巻」(昭和43年・国土地理院)

稲井町と石巻市が合併した翌年の2万5千分の地図。井内地区と真野川流域、山沿いの各集落に人家が点在している。昭和42年に石巻大橋①が架橋、翌43年に2代目の開北橋②が架橋され、湊經由の稲井地区へと、稲井經由の河北地区への交通の利便性はこの2年で大きく飛躍した。しかし、来たる車社会に対し、井内地区の狭路③が逆にクロースアップされ、昭和55年からの井内バイパスの計画に繋がっていった。また、南境・北境の沼④は埋め立てられ、耕地に変わっている。



地図11 「真野川、高木川、水沼川流路変遷図」(年号不明・「稲井町史」より)

昭和35年発行の「稲井町史」の添付資料。真野川・高城川・水沼川の水路の変遷をまとめ、当時の町並みと照合させたもの。往古の川の流路と改修後の流路で町並みの比較をしながら、旧字名や神社仏閣、学校等の施設を掲載し、位置関係をわかりやすく解説している。

赤線は真野川、高城川、水沼川の流路
 青線は現在、川と山、川と川
 水沼川双赤ヨリと高沼川、分岐表迄元線と新開墾
 高木川旧区、分岐表ヨリ石橋迄元線と新開墾
 真野川上流高沼川が変りナシ



空撮 「袋谷地・井内地区」(昭和27年頃・国土地理院)

昭和27年頃の航空写真。昭和14年延長開通の石巻線ルート①①がはっきり見える。井内地区は、真野川沿い②②に住宅が密集しているが、後に道路整備される井内バイパスはまだまだ見られない。石巻駅北側の耕地に比べ、袋谷地、稲井地区の耕地が整然と整ってきているのがわかる。



空撮 「流留・祝田・地区」(昭和27年頃・国土地理院)

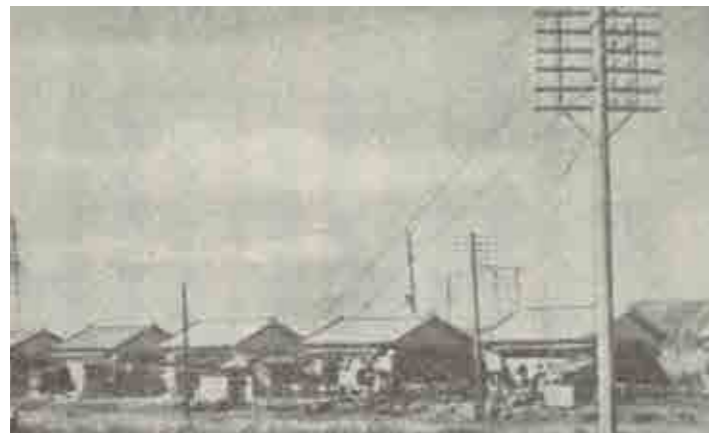
前ページの別カット写真。万石浦と流留・沢田地区。万石浦の塩田①①と内陸側の田んぼ②②を比較しても、塩田の大きさがよく分かる。現在は住宅が密集する宅地やスーパーとなっている場所③③の当時の様子が見てとれる。主要道路は、ほぼ現在のルートと変わらない。



▲ 稲井町役場(昭和30年代・『稲井町史』)
稲井町史には、明治19年新築で大瓜村の東南端に位置するも、水陸往來の便を考慮しての位置で決めたとある。



▲ 大瓜区の一部(昭和30年代・『稲井町史』)
大瓜区内亀山付近からの撮影。奥の集落が亀山集落。



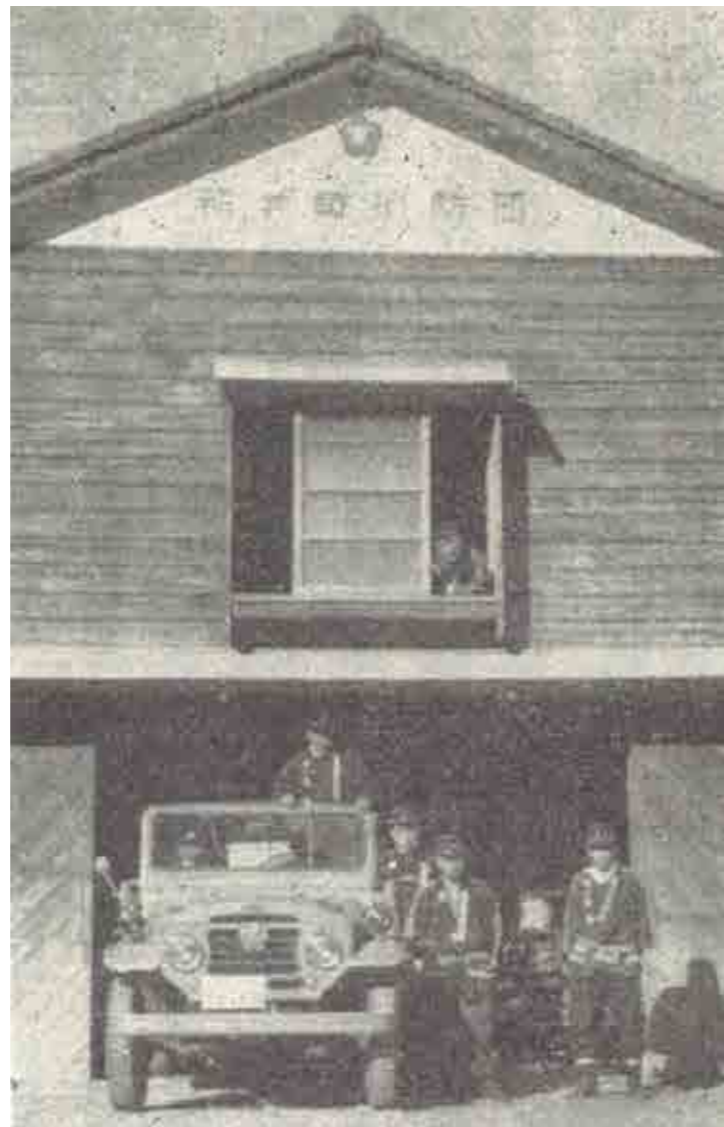
▲ 町営大瓜住宅(昭和30年代・『稲井町史』) 現在の大瓜井内地域。



▲ 解体されるかやぶきの家(昭和30年代・『稲井町史』)
井内字八幡山下の古いかやぶき屋根家屋の解体。時代の流れではあるができるだけ残したいものである。



◀ 大瓜鷺集(亀山幸一著『グラビア石巻』)
真野川沿いの大瓜鷺集落。館山中腹に見える白い屋根の稲井中学校は昭和56年県道沿いの現在地に新築移転した。



▲ 消防自動車(昭和30年代・『稲井町史』)
稲井村消防組は、明治36、37年頃に設置され、戦時中の警防団を経て消防法が施行された昭和23年に稲井村消防団として発足した。



▲ 稲井町の中心街(昭和30年代・『稲井町史』)
昭和34年町制施行当時の稲井町を八幡山から撮影。真野川にかかる橋は井内橋。スレート葺木造平屋建ての役場庁舎はこの後に3階建てに建て替えられ42年に石巻市と合併することになる。



▲ 井内東部「新栄」の誕生(亀山幸一著『グラビア石巻』)
石巻線稲井駅北側の井内字一番(旧字井内字一番圃)、井内字二番(旧字井内字二番圃)の水田約22haが宅地造成され、新興住宅街「新栄一丁目、新栄二丁目」として平成9年に誕生した。



▲ 雪化粧した北上川辺(昭和55年頃・亀山幸一著『グラビア石巻』)
井内八幡山公園からの俯瞰。手前に稲井支所がみえる大瓜井内の街。左側は藤巻、右側川向うは水明南。この間をつなぐ「藤巻渡し」が昭和の時代まであった。

水沼



◀ 水沼区の一部(昭和30年代・『稲井町史』)
水沼地区は葉たばこ生産が盛んで、県内一の品質と収量を誇った。

真野・沼津



▲ 真野内原(昭和50年頃・亀山幸一著「グラビア石巻」)
内原川を中心に山奥深く点在する真野内原地区。



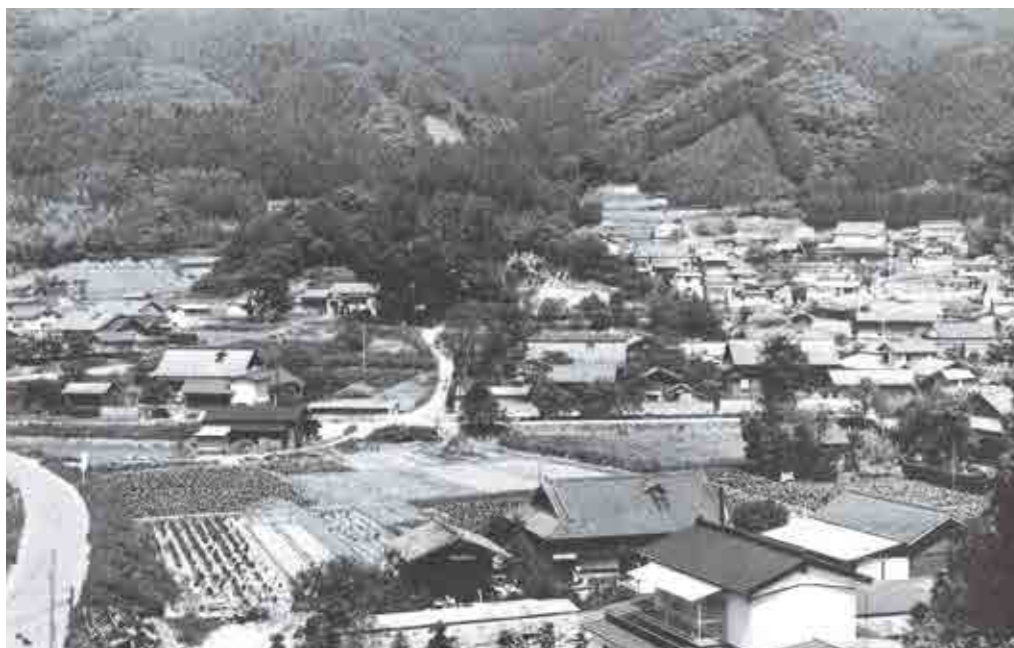
▲ 沼津(昭和50年頃・亀山幸一著「グラビア石巻」)
石巻地方唯一のゴルフ場だった沼津地区。沼津貝塚は国指定史跡。



▲ 真野地区の土地改良事業(昭和26/46年・「石巻・東松島・女川今昔写真帖」)
稲井土地改良区にある真野大谷地区の貴重な写真。左は土地改良事業前(昭和26年)で、農家は低湿地に田舟を浮かべ、腰まで水につかり田植えをしている。右は土地改良事業後(昭和46年)で、乾田となり耕運機で耕起作業をしている。土地改良事業によって、農家の作業負担は大きく軽減された。



高木



▲ 高木東部地区(昭和50年頃・亀山幸一著「グラビア石巻」)
写真中央の坂道を昇ったところに吉祥寺と公園、高木公民館があった。



▲ 高木集落(「石巻・東松島・女川今昔写真帖」)
高木集落の同じ地点での撮影。
上が昭和50年、下が平成20年。

流留・金山



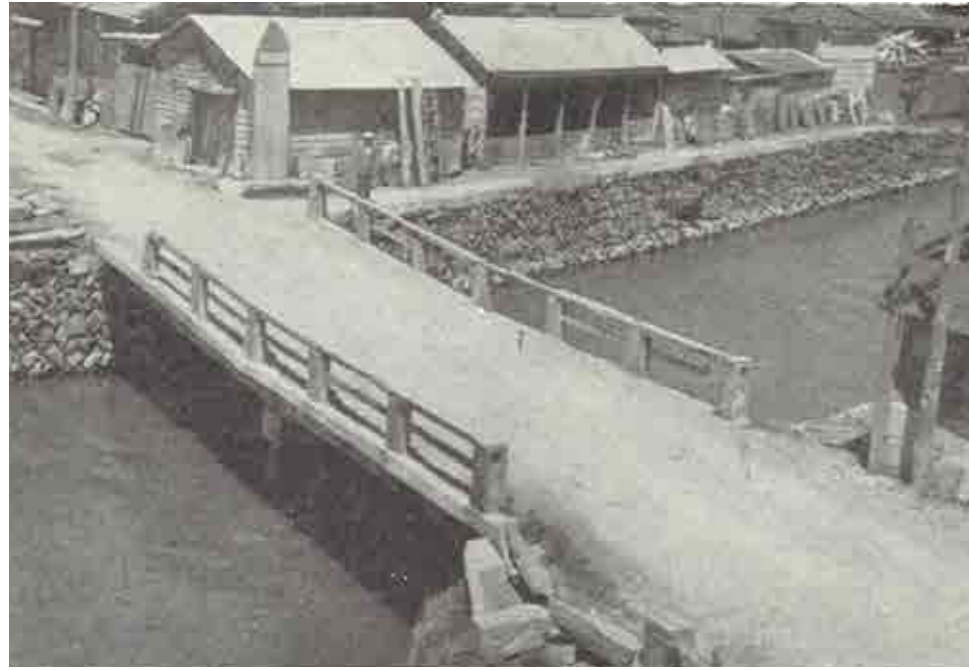
◀ 流留区の一部(昭和30年代・「稲井町史」)
現在の国道398号流留集会場付近。流留から沢田駅方面の風景と考えられる。



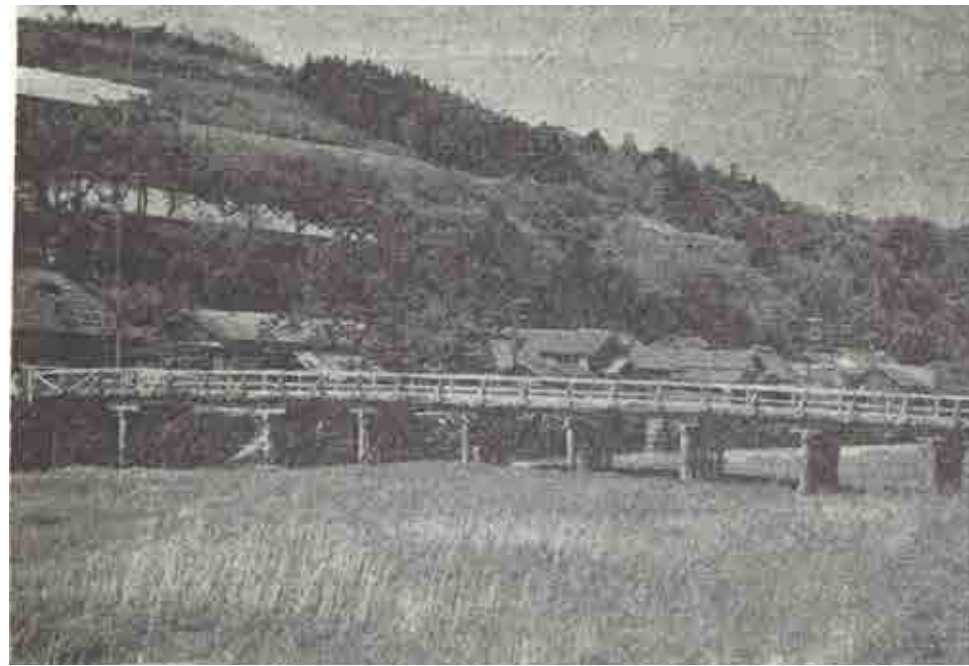
◀ 金山峠から望む万石浦の風景(昭和30年代・「稲井町史」)
現在の県道234号線。稲井からライフル射撃場を通って万生園のある折立へ下って行く所。



◀ 流留の旭島(昭和30年代・「稲井町史」)
流留の村名の由来となった旭天女が流れ留まった島で別名弁天島。社殿には、中国風の服を着て八本の手に武器や宝珠を持った弁財天が祀られている。



◀ 嘉明橋(昭和30年代・「稲井町史」)
大瓜井内を横断する石巻線ガード下。向こうに見えるのは、松下石材店。



◀ 明治橋(昭和30年代・「稲井町史」)
鷺巢の真野川には、乗船者自らで縄を手繰り寄せる無人の渡しがあったが、明治39年頃、当区の篤志家阿部治左衛門がこれを不便とし、自費で木橋を架設し明治橋と命名。川沿いは鷺ノ巢集落。中腹に見えるのは学校。



◀ 井内橋(昭和30年代・「稲井町史」)
橋のたもとから2軒目の瓦屋根は、後藤東吉石材店。2階建ては新屋。奥は、狼ノ沢。



▲ 開北橋
昭和23年架橋の開北橋は、石巻と稲井西部及び旧河北町方面を結ぶ橋で利用者が増大していたが、橋自体が狭小で脆弱な木造橋のため、増水時の危険性もあった。写真左は昭和30年代前半の大瓜方面から水押側を(「稲井町史」)、右は昭和39年、水押側から大瓜方面を見る写真(「今昔写真帖」)で、上流側の杭は増水時の流木や冬季の水等への備えという。写真の通り、車両は通行できず、徒歩と軽二輪のみの通行だった。橋を渡る途中に何箇所かの穴があり、そこから北上川の水面が見え、怖かったという人も多い。



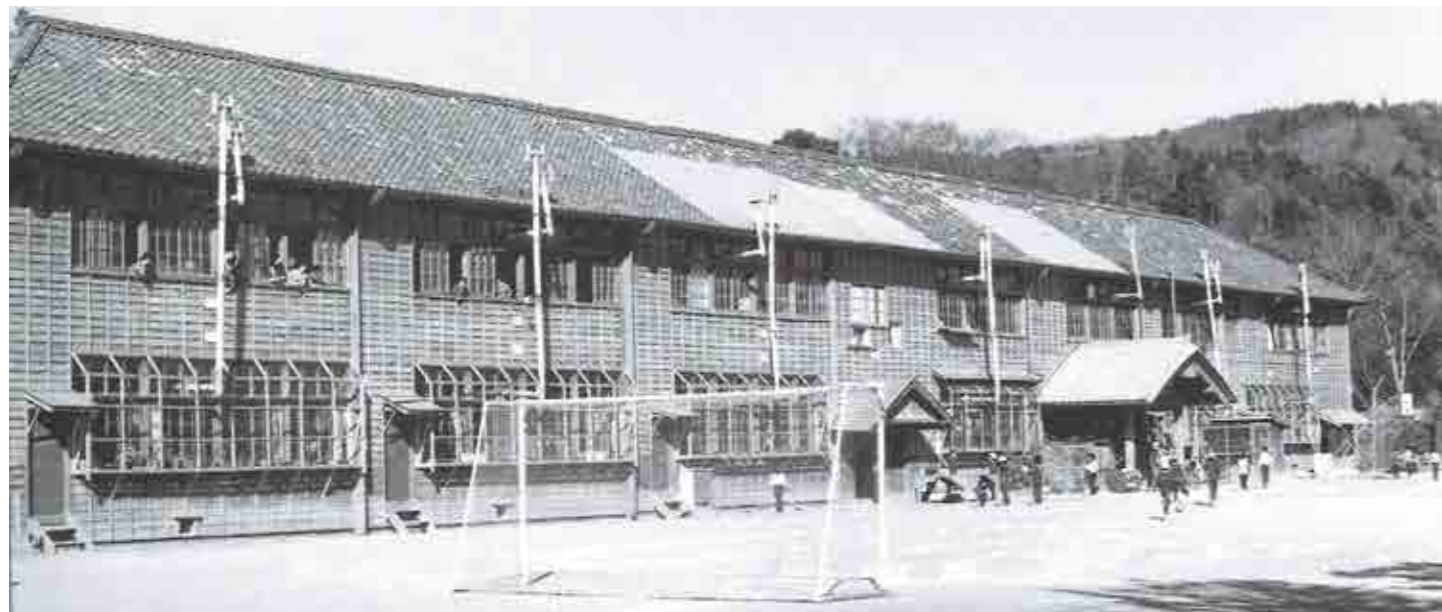
▲ 真野川の閘門(昭和30年代・「稲井町史」)
古来より、地勢的宿命であった真野川の治水対策は、昭和26年に全額国庫事業として起工した。堤防改修で対応できない北上川の逆流対策として閘門を設置し、昭和27年真野川閘門が竣工した。



▲ 排水機開場(昭和30年代・「稲井町史」)
昭和27年の真野川閘門の工事完了に伴う稲井地区用排水改良事業により、地区内の排水効果で乾田化も進み、美田が広がった。井内一番(現新栄1丁目入口付近)の機開場。



◀ 杜鹿軌道(株)開業10周年記念運行(故 柴山繁氏蔵・柴山耕一氏管理)
762ミリの狭軌馬車鉄道として開業。始発の石巻湊と渡波町大宮町間は所要時間約20分、料金は10銭。杜鹿軌道は1924年5月、金華山軌道に吸収合併。新会社は25年11月10日、ガソリン機関車(4両)を導入。26年3月から路線を石巻湊・渡波間から女川町間まで13.8kmに延長して営業。渡波から、とりたち(漢字不明)、流留、沢田、折立、安住、浦宿を経由し、女川まで運行した。金華山軌道の短所は低速、普及した高速のバスに乗客を奪われ、やがて1939年の石巻線の女川駅延伸開業で買収されて廃線となった。



▲ 大瓜小学校(昭和50年頃・亀山幸一著「グラビア石巻 第3集」)
明治6年大瓜南境小学校として開校。明治22年、稲井尋常小学校となり、南境、高木、真野、水沼、沼津、沢田、流留に分教場設置。29年に沼津と沢田分教場を合併独立させ、金山小学校を開校。昭和56年3月稲井小に統合し、閉校。



▲ 大瓜小学校新校舎落成式(明治32年頃・亀山幸一著「グラビア石巻 第3集」) 明治32年の新校舎落成式の風景。学校坂道には、露店が並んでいる。



▲ 真野小学校(昭和50年頃・亀山幸一著「グラビア石巻 第3集」)
明治6年真野小学校として長谷寺に開校。同22年、稲井尋常小学校真野分教場となるが、同34年真野尋常小学校として独立。その後、稲井村立、稲井町立、石巻市立を経て、昭和56年3月稲井小に統合し、閉校。



▲ 金山小学校(昭和50年頃・亀山幸一著「グラビア石巻 第3集」)
明治6年長流寺に開校した流留小学校は、同8年沢田小学校に改称、同19年に女川村浦宿小学校沢田分教場、同22年稲井小沢田分教場となった。同29年沼津分校と合併し、大瓜小学校金山分教場と改編。



▲ 稲井小学校(昭和50年頃・亀山幸一著「グラビア石巻 第3集」)
大正4年には、稲井・真野・金山の尋常小学校に、南境と高木に分校があった。村当局は財政面からも統合を図り、高木分教場に大正4年、稲井村立稲井尋常小学校を開校、後の稲井小学校となる。



▲ 稲井中学校旧校舎(昭和50年頃・亀山幸一著「グラビア石巻 第3集」)
大瓜鷲巢山にあった旧校舎。昭和22年、稲井村立稲井中学校として開校。



▲ 稲井公民館(昭和30年代・「稲井町史」)
昭和23年に役場内に暫定的に公民館を開設したが、専任職員も独立館もなかった。昭和28年、稲井駅近くの旧公会堂跡地に公民館を建設した。その後、各部落に合計17の部落公民館も設置された。



◀ 八幡神社のみこし(昭和50年頃・亀山幸一著「グラビア石巻」)
神輿を担ぎ、井内字八幡山の階段を昇り、八幡神社に奉納。神輿は、八幡神社と山神様の2つあったという。



▶ 正月の獅子舞(昭和50年頃・亀山幸一氏撮影)
毎年正月の2日と3日に、井内町内各戸を新年の無病息災を祈願して回った。



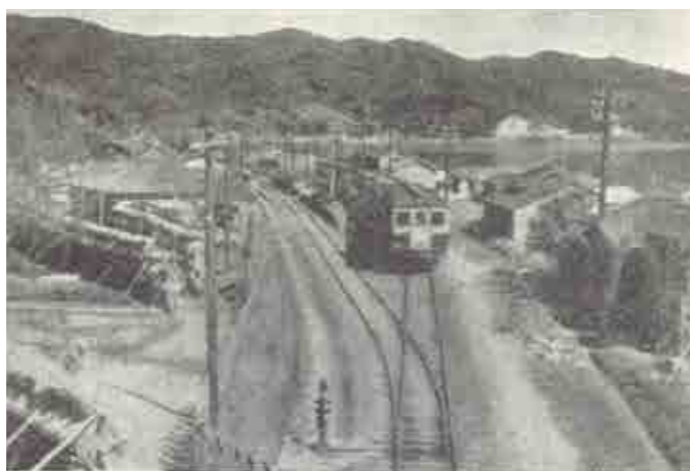
▲ 開業当時の陸前稲井駅(昭和14年頃・「稲井町史」)
昭和14年、女川まで延伸した石巻線には、石巻～女川間に陸前稲井、渡波、沢田の3駅が設置された。駅舎が渡波や女川と類似しているのは、大正末期から全国に鉄道網がひろがり、主要駅以外は基本となる設計図を流用したためと考えられる。



▲ 駅舎と貨物線があった陸前稲井駅(昭和50年頃・亀山幸一著「グラビア石巻 第3集」)
陸前稲井駅には、貨物線も併設され井内石や米の運搬に活用された。写真左側の線路が貨物用線路だった。当時は、蒸気機関車(C-11)の牽引だったが、昭和49年3月にディーゼル機関車牽引となり、貨物営業も昭和59年に廃止された。



▲ 沢田駅(昭和50年頃・亀山幸一著「グラビア石巻 第3集」)
沢田駅は、海岸線沿いに敷設された線路と主要道路(現国道398号)の間に設けられたため、駅前広場等施設がなく、当時から近所の子供達の遊び場として使われていたという。



▲ 北上川鉄橋を渡るディーゼルカー(平成15年・亀山幸一著「グラビア石巻」)
雪に覆われた井内から袋谷地に北上川鉄橋を渡る石巻線のディーゼルカー。雪の白、空と川の青、そしてディーゼルカーの赤のコントラストが美しい貴重なカラー写真。



▲ 路線バスがやっと通れるほどの道幅(昭和40年頃・亀山幸一著「グラビア石巻 第3集」)
石巻行き路線バスがやっと通れるほどの道幅を徐行しながら通行していた。手前の自転車すらすれ違う際、大変だったようだ。地元の人に聞くと、「車同士は、地元人は慣れたもので、すれ違う場所を理解していたし、何より車が少なかったからね。」とあまり気にならなかったようだ。



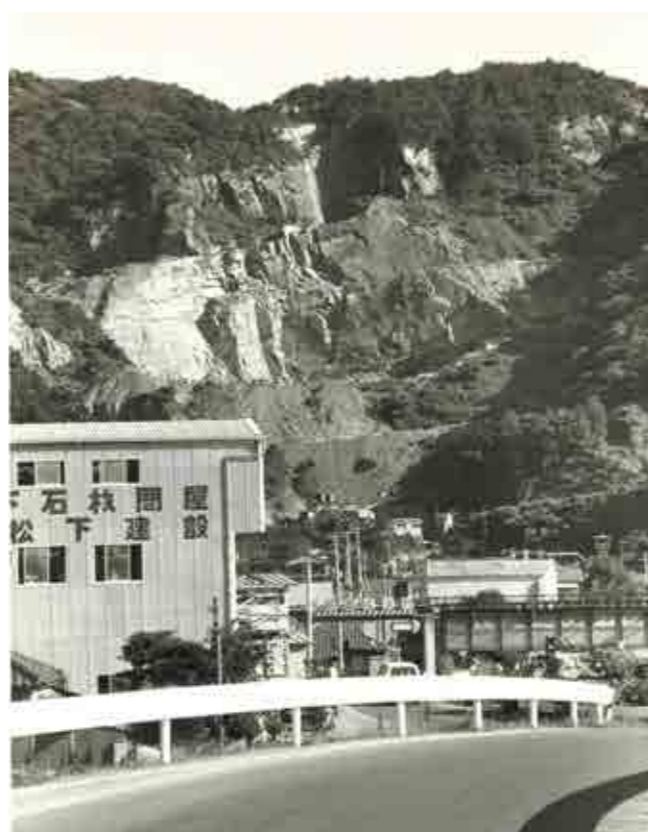
▲ 真野川埋立による井内バイパス工事(昭和55年頃・亀山幸一著「グラビア石巻 第3集」)
真野川の本流が、閘門建設と同時に付け替えられたのを機会に、当時の青木市長は住民の要望に応えるため、市の単独事業として、旧真野川を埋めてバイパス道路を造り、稲井地区に交通の利便をもたらした。



▲ 工事中の井内バイパス(昭和55年頃・亀山幸一著「グラビア石巻 第3集」)
井内地区は、急峻な山坂を背負い、前は北上川・真野川が流れていて、道幅は狭く県道「稲井停車場線」は、路線バスがようやく通れる道幅で、車社会となった当時、町の発展を阻害する大きな社会問題となっていた。



▲ 井内バイパス完成(昭和57年・亀山幸一著「グラビア石巻 第3集」)
左の写真と見比べて、完成後の交通アクセスは著しく便利になった。



▲ 石巻北部バイパス開通(平成21年・石巻日日新聞社刊「石巻の大正・昭和・平成」)
平成21年、蛇田地区の国道45号から稲井～女川を結ぶ石巻北部バイパスの首波神大橋と北部バイパスの一部が開通。その後、平成30年には、大瓜工区も完成し、稲井地区まで開通した。

◀ 北上川沿いに南境から井内方面に向かう(昭和50年代・亀山幸一氏撮影)
北上川沿いに石巻線のガードをくぐり、井内に入る手前には、石材店が立ち並んでいた。正面には、井内山狼沢採石場。石の町らしい風景が広がっていた。

明治維新以降の市町村の成り立ち

- 明治元(1868)年 9月 仙台藩主・伊達慶邦が薩長軍に降伏。
12月 牡鹿郡・桃生郡・本吉郡は仙台藩から分離され、高崎藩の取締地となる。
- 明治2(1869)年 7月 高崎藩の取締地が、明治政府直轄の桃生県となる。
8月 桃生県を石巻県に改称し、県庁を石巻に置く。
- 明治3(1870)年 9月 石巻県が登米県に編入される。
- 明治4(1871)年 11月 第1次府県統合により、仙台県の管轄になる。
- 明治5(1872)年 1月 仙台県が宮城県に改称される。
4月 大区小区制施行により、宮城県13大区となる。

宮城県第13大区(全23小区)	
小1区	石巻村
小2区	門脇村
小3区	蛇田村
小4区	湊村
小5区	南境村
小6区	大瓜村
小7区	高木村・水沼村
小8区	真野村
小9区	沢田村・流留村・沼津村
小10区	根岸村
小11区	祝田浜・佐須浜・折浜・小竹浜

明治7(1874)年 4月 区の再編により、宮城県第7大区となる。

宮城県第7大区 (牡鹿郡は1~6小区、桃生郡7~14小区)	
小1区	石巻村・門脇村・蛇田村
小2区	湊村・根岸村・沢田村・流留村
小3区	大瓜村・高木村・沼津村・真野村・水沼村・南境村
小4区	祝田浜・佐須浜・荻浜・折浜・狐崎浜・小竹浜・小積浜・侍浜・竹浜・田代浜・牧浜・小網倉浜・清水田浜・月浦・福貴浦・桃浦

明治9(1876)年 11月 区の再編により、桃生郡・本吉郡とともに宮城県第5大区となる。

宮城県第5大区 (全9小区、桃生郡・牡鹿郡3~4、本吉郡)	
小3区	石巻村・門脇村・湊村・蛇田村・大瓜村・高木村・真野村・水沼村・南境村

小4区	根岸村・沢田村・流留村・沼津村・祝田浜・佐須浜・荻浜・その他の牡鹿郡長渡浜・大原浜・給分浜・泊浜・新山浜・寄磯浜
-----	--

明治11(1878)年 10月 郡区町村制施行、牡鹿郡が発足。石巻村に郡役所を置く。大区小区制廃止。

明治22(1889)年 4月 町村制施行により、以下の2町6村が発足。

石巻町	石巻村・門脇村・湊村(井内・磯田・竜ノ口除く)
蛇田村	蛇田村単独村制
稲井村	南境村・大瓜村・高木村・水沼村・真野村・沼津村・流留村・沢田村・湊村(井内・磯田・竜ノ口)
渡波町	根岸村・祝田浜・佐須浜
荻浜村	荻浜・折浜・狐崎浜・小竹浜・小積浜・侍浜・竹浜・田代浜・牧浜・月浦・福貴浦・桃浦
大原村	小網倉浜・清水田浜・大原浜・給分浜・泊浜・新山浜・寄磯浜・谷川浜・鮫浦
鮎川村	鮎川浜・網地浜・十八成浜・長渡浜
女川村	女川浜・浦宿浜・針浜・飯子浜・大石原浜・小乗浜・高白浜・塚浜・野々浜・その他

昭和8(1933)年 石巻町が、市制施行して石巻市となる。

昭和24(1949)年 4月 蛇田村の一部、北上運河以東(明神山・山下・山下西・鍋倉・鍋倉前・南谷地・七窪・横堤・横堤南・揚慮原・揚慮原西・深淵・境谷地・清水尻・清水尻西・西中里・東中里・面剣田・水押)が石巻市に編入。

昭和30(1955)年 1月 蛇田村が石巻市に編入。
4月 荻浜村が石巻市に編入。

昭和34(1959)年 4月 稲井村が町制施行して、稲井町となる。
5月 渡波町が石巻市と稲井町に分割編入。

昭和42(1969)年 3月 稲井町が石巻市に編入。

平成17(2005)年 4月 牡鹿郡牡鹿町、桃生郡桃生町・河南町・河北町・北上町・雄勝町が石巻市と合併。桃生郡矢本町、鳴瀬町が合併し、東松島市となる。

2019年10月からスタートした『おらほの町の郷土史づくりプロジェクト』は、昨年4会場で今年は3会場で開催しました。この間、多くの方々から、「懐かしいね〜」、「あ〜、あった、あった」などの声が出て、その時代の記憶を呼び起こし、時には、自宅にある資料を提供いただき、それらを記録に残す作業にご協力いただきました。「震災でふるさとを離れた友人に教えたいから、資料ください」とお話しがあったり、予想外の事もありました。

今回、3回のワークショップをベースにまとめた資料と住民の方々からいただいた情報を1冊にまとめ、地域郷土史のひとつとして残したいと思います。東日本大震災と津波の影響で大きな変化を強いられたこの地区の郷土づくりに少しでもお役に立てて、今後の地域活性化を心より祈念しております。

特定非営利活動法人 石巻アーカイブ

【参考文献】

- 『石巻市史』『石巻の歴史』(石巻市)
- 『稲井町史』(稲井町・昭和35年刊)
- 『宮城県地名考』(宝文堂刊・菊池勝之助著・昭和45年)
- 『写真集 明治大正昭和 石巻』(国書刊行会・昭和55年刊)
- 『グラビア石巻』(亀山幸一著・昭和56年刊)
- 『続 グラビア石巻』(亀山幸一著・昭和59年刊)
- 『グラビア石巻 第3集』(亀山幸一著・平成15年刊)
- 『石巻今はなくなった風景』(小松健市著・昭和56年刊)
- 『宮城県の地名』(平凡社刊)

- 『石巻今はなくなった風景2』(小松健市著・昭和57年刊)
- 『紅海心一稲井三治翁の八十八年一』(亀山幸一著・昭和63年刊)
- 『十條製紙石巻工場50年史』(同編集委員会編・平成2年刊)
- 『石巻・桃生・牡鹿の100年』(郷土出版社・平成12年刊)
- 『石巻・東松島・女川今昔写真帖』(郷土出版社・平成21年刊)
- 『宮城三陸・登米の昭和』(いき出版社・令和2年刊)
- 『石巻の大正・昭和・平成』(石巻日日新聞社・平成26年刊)
- 『鉄道ビクトリアル』((株)電気車研究会刊 2015年8月号
「古い写真に見る牡鹿軌道・金華山軌道」より)

【資料提供・編集協力】

- ・阿部 和夫 氏
- ・亀山 幸一 氏
- ・鈴木 紀男 氏
- ・本間 英一 氏
- ・浅野 太一郎 氏
- ・故 柴山 繁 氏
- ・柴山 耕一 氏
- ・真野コレクション
- ・邊見 清二 氏
- ・菊田 貞吾 氏
- ・高橋 佑弥 氏
- ・長谷部 雅史 氏
- ・石川 敏 氏
- ・(株)石巻日日新聞社
- ・石巻市
- ・石巻市図書館
- ・(株)昭文社
- ・宮城県公文書館
- ・国土地理院
- ・(株)七星社

写真と地図で見る歴史『稲井事典』

【非売品】

(おらほの町の郷土史づくりプロジェクト報告書)

【編集】特定非営利活動法人 石巻アーカイブ

【編集人】小野寺 豊

【発行】令和3年3月

※本報告書は、令和2年度石巻市心の復興事業補助金で制作しました。